森岡正博と田中美津
～「自分を棚上げにしない」ために～[1]

氏名：宮島　怜
指導教員：西　　泉

目次・・1

序論・・2

第1章　森岡正博研究 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
　　1.1　「自分を棚上げにしない」生命学 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
　　1.2　ウーマン・リブとの出会い ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

第2章　田中美津研究 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
　　2.1　田中美津と「とり乱し」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
　　2.2　田中美津を通して「女であること」を考える ・・・・・・・・・・・・・・・・9

第3章　「自分を棚上げにしない」と「とり乱し」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12

結論 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13

参考文献 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14

[1]　本論文を執筆するにあたり、短い間ではあるが朝倉輝一先生に直接お会いし、アドバイスを頂き、お世話になったので謝意を表したい。朝倉輝一先生の助言がなければ、この論文はこのような形で完成することはなかったであろう。

序論

脳死は人の死か、臓器移植法改正をめぐる議論が行われていたさなか[2]、私は指導教員に勧められ森岡正博の『脳死の人』（森岡 2003）を読むことになった。そこで初めて生命倫理を含む生命学という分野の本に触れた。彼の考えは斬新で、私にとって新鮮であった。彼は、脳死状態の人からの臓器移植については慎重派であり、脳死というものを、脳死状態の人をめぐる、人と人との関わり方の問題であると考え、家族の視点、親しかった人々の視点から、脳死というものをとらえた。新しい角度から物事を見るその考えに、私は興味を持った。

脳死問題については、森岡（2003）の他に森岡（2005）でも取り上げられていて、脳死と臓器移植の問題を、彼が提唱した「生命学」の視点から考えている。森岡（2005：117）では、脳死を人の死か、というアンケートで「脳死は人の死」という答えが 40～50%、「脳死は人の死ではない」という答えが 30%、残りが「わからない」という結果になった。しかし、アンケート調査に答えた人のほとんどは、実際に脳死状態の人を看取った経験を持っていないという。ほとんどの人が脳死というものを頭の中だけで考えていて、自分のこととして考えていないということになり、脳死を他人事のように考えている。森岡は、「生命学」の視点から脳死問題を自分との関係においてどうなのか、同じ状況になったときどうすればいいのか、照らし合わせ、自分を振り返ることの大切さを訴えている。

本論文では、脳死問題のように、「生命学」の視点から宗教や、フェミニズム、生命倫理などの問題に対して、どう立ち向かっていけるのかを論じている著書を参考にし、森岡の思想を考察していく。また、その中でただ一人、森岡が例外といえるほどに注目した田中美津という女性について取り上げ、考察していく。

田中美津に刺激を受けた森岡正博、その森岡正博に刺激を受けた私から見る田中美津を分析していくことが本論文のテーマである。あくまでも森岡正博を中心軸において、森岡の生命学、森岡にとっての田中美津の存在、私から見た田中美津を研究していきたい。森岡の「生命学」の基本発想でもある「自分を棚上げにしない思想」と田中美津の思想の分析、また、田中美津と私の考えに違いはあるのかどうか、そこから自分自身にとって何が得られるのかを研究していく。

本論文では、森岡の「生命学」がどのようなものなのか、森岡がどんなことに興味をもったのか、第１章でまとめていく。第 2 章では、森岡が注目した田中美津という女性について述べ、彼女の思想を分析していく。また、森岡思想のキーワードともいえる「自分を棚上げにしない」ためにも、私自身が体験したことを、田中（2001、2005）を通して考えていく。第３章では、森岡の「自分を棚上げにしない」というキーワードと田中の「とり乱し」というキーワードを比較し、その二つのキーワードの間にある差や共通点を分析する。

---

[2] 2009 年 6 月 18 日の衆議院本会議で臓器移植法改正 A 案が可決された。A 案は、脳死は一般に人の死とし、本人の事前の意思表示がなくても、家族の承諾あれば子どもでも臓器提供できる。

第１章　森岡正博研究

本章では、森岡正博の提唱する「生命学」を紹介する。また、森岡がどういうことに興味を持ったのかを考察していく。

1.1「自分を棚上げにしない」生命学

森岡（2001：131）は、生命倫理の研究を経て、今ここで生きている「私」と直接かかわっていくような学問がほしいと思った。そして「生命学」と呼ぶべき学問を提唱した。脳死問題や臓器移植、中絶など難しく長い時間をかけて考えなければならない問題に対して、生命倫理は、いいか悪いかの二分法で議論をする傾向がある。また、自分を棚上げにしたままで議論したり、他人を高みから偉そうに批評したりする人が多い中、森岡は、そのような傾向を持っていた生命倫理というものに疑問を感じていたのである。そのような傾向をもつ生命倫理の限界を突破しようとする試みの中で「生命学」が誕生したといえる[3]。
では、「生命学」とは何なのかを、森岡（1996、2001、2006）に基づいて、考察したい。

森岡は自身のウェブサイトで、「生命学とは、自分をけっして棚上げにすることなく、生命について深く表現しながら、生きていくことである」と生命学の基本的発想を定義づけている[4]。

この生命学の理念をさらに深く掘り下げて解釈してみると、「自分をけっして棚上げにしない」というキーワードが出てくる。「自分をけっして棚上げにしない」考え方とは、何かについて考えるときに、私の場合はどうなのか、私自身それをどう思うのか、どのようにこの問題と関わってきているのか、という問いを絶えず自分自身に発し続けることである。
では、自分の身近や、普段の生活において、「自分を棚上げにしない」思想をもう少し具体的に考えるとしたら、どんな例があるのだろうか。

まず「自分を棚上げにする」例をいくつかあげてみたい。「棚上げにする」ということは、言っていることと、やっていることが一致していないことである。これは、誰でも１回は経験したことがあるだろう。私の場合、自分の生活を振り返ってみれば、日常茶飯事である。例えば、授業の発表などで、環境問題について調べ、その中で私は「レジ袋をもらわないなど身近なところから、一人一人がゴミを減らす努力をしなければない」などと述べる。そして、その意思は、その時で終わってしまい、コンビニでレジ袋をもらって帰る。これは、明らかに矛盾であり、自分を棚上げにしていることになる。また、相手の欠点を注意する際に、自分のことは棚に上げて相手に要求することが多いことも一つの例である。

---

[3]　脳死問題を例にとって考えれば、脳死問題を考えるとき、アメリカなど英語圏の場合、テーマが狭い意味での医療の倫理に集中し科学と倫理、あるいは人間と生命のかかわりについて十分な議論がなされていない。要するに、脳死という医学的な状態について医師の目から見た「医学的な面」での脳死論を考えてしまいがちで、どの時点で死を判断するかなど、技術的な面での判断に偏る傾向が強いのがアメリカの生命倫理の特徴である（森岡：2000）。日本はアメリカから生命倫理を輸入した形となり、アメリカの影響を受けていると言える。しかし、日本の生命倫理の考え方は、森岡を中心に脳死をめぐる人と人との関わり合いなど、人それぞれ違う脳死の「倫理的側面」に十分に注目し、今までのアメリカでは取り扱っていない問題を含んだ脳死問題を考えている。

[4] 森岡生命学ウェブページ　（http://www.lifestudies.org/jp/seimeigaku03.htm　2009 年 12 月 9 日参照）

「自分を棚上げにしない」というのは、単純そうで実は結構奥が深い思想だと思う。「自分を棚上げにしない」ことができる人はあまりいないのが現実である。または、自分を棚上げにしていることさえも気付かない人の方が多い。環境問題についての例で、エコロジストや環境学者も、いくら講演などでエコを訴えても、自分自身がそれを実行していなければそれは自分を棚上げしていることになり、生命学の考え方に違反している。しかし、そうなれば、生命学の考え方は誰一人持つことはできない。

森岡がいう「自分を棚上げにしない」考え方とは一体何なのか。自分を棚上げにしてしまった時、生命学ではどのように考えればいいのだろうか。森岡（2005：189）は、自分が言っていることと、自分が実際にしたことが違ってしまったとき、生命学では、まずその事実から目をそらさずに、それをそのまま直視する。そのうえで、自分がどうしてそのようにしてしまったのだろうかと考えることだと述べている。森岡は、物事を考える際に常に自分との関係においてどうなのか、照らし合せ、自分を振り返ることの大切さを訴えている。これは、生命学の基本であり、森岡正博の思想において最大のポイントであるといえるだろう。この「自分をけっして棚上げにしない」というキーワードがある限り、この生命学は、生命学を追求しようとする人の数だけ存在するという[5]。つまり、自己を問いなおし、これからどうやって生きていくかを考え、行動していくので、生命学を探求する人は、それぞれの生命学があるということになる。

生命学について最も詳しく書かれているのは、森岡（1996）である。この本には、森岡がオウム真理教事件をきっかけに、生命とは何かを考え、何よりも「オウム真理教の時代を生きなければならない＜私＞とは何か」を探求すべく、森岡自身の宗教と生命に関する体験など、森岡の個人史ともいえる内容が書かれている。

森岡はオウム事件を考える際に、頭から「オウムは悪い」と決めつけるわけでもなく、自分はこの事件に一切無関係だというような口ぶりで、批評するわけでもない。森岡自身はどうなのか、もしかしたら、自分もオウムに入っていたのかもしれないというような感情さえあったという。その背景には、森岡の学生時代に味わった「自然科学というものに対する失望」があった。では、なぜ森岡は「オウムに入っていたかもしれない」という感覚を持ったか、「自分を棚上げにしない」というキーワードをもとに考察したいと思う。

森岡（1996：18－20）としては、オウムの地下鉄サリン事件後、報道の中でオウム真理教にある科学技術省というものが大きく取り上げられたことに注目し、科学者を目指していた若者たちが科学技術省に入り、サリンをはじめとした殺人兵器を開発したという事実を知る。科学者の卵が宗教に走るケースが多いのは、彼らが「人間とは何か」「生死とは何か」という問いに対して、自分たちがやっている科学では答えが出ないという問題に直面するからである。悩める科学者にとって、人間とは、生死とは、という問題を簡潔に説いてくれる宗教はまさに救いであったといえる。

宗教に至るまでのこのような経緯は、森岡にとって共感できる部分である。なぜなら森岡自身も大学に入り自然科学に対して失望したからである。このような学生時代の出来事

[5] 注４と同一のウェブサイトによる。

を森岡（1996：22－35）では、14 ページにもわたって語っている。

また、森岡（1996：72－90）では、神秘体験や超能力や悟りがほしいという、森岡自身の内面に潜む願望について語っている。そして、そういう願望についてきっちりと認識しないと、オウム真理教などに惹かれていく人間のことは分からないと述べている。

森岡がオウム真理教に入信しなかったのは、信仰にたいする違和感があったからである。そのことを森岡（1996：10－11）では、次のような言葉で語っている。

> 私は、生と死の問題にこだわり続けてきた。しかし、それを宗教の道を通って探求することはできない。なぜなら、私は、「誰かがすでに語った絶対の真理」というものを受け入れることはできないし、そういう真理や絶対者や教祖への「信仰」をもつこともまたできないからである。

森岡は、科学者になりたかったがなれなかった。宗教という枠にも入りたくても入れなかった。人間の生と死の問題を科学でもなく宗教でもない立場から見ようとしたのである。このやり方を、森岡は第三の道と位置付け「生命学」と呼んでいる[6]。

森岡が「自分自身を語る」手法を使って、様々な問題を考えていくやり方に私は興味を持った。自らの体験を語り、その問題を自分の思想に取り込んで考える作者に出会うのは初めてであった。また、世間一般の意見ではなく、常にものごとの光と影、裏と表を見ていく。そんな一風変わった考えに私は、興味を持ったのである。宗教や科学という枠組みに当てはまらず、自らの生き方を構築していく。自らを棚上げにせず、自分自身と向き合っていくことの大切さを私は、森岡を通して学ぶことができた。

次の節では、森岡の「生命学」において重大なヒントとなるウーマン・リブについて紹介する。

1.2　ウーマン・リブとの出会い

これまで森岡における「生命学」の考え方について述べてきたが、ここではこの「生命学」の実践が見られるウーマン・リブについて森岡（2001、2005）を基に考察していく[7]。

森岡（2001：132－133）は、1990 年代初頭に、日本のフェミニズムと生命倫理について調査を開始した時、ウーマン・リブというものを知った。1970 年代、日本では、ウーマン・リブという女性解放運動がおこった。ウーマン・リブは、優生保護法[8]や人工妊娠中絶などの問題をめぐって、パンフレット、ビラなどを配り、独自の主張を草の根運動で繰り広げた。もともとはアメリカのウィメンズ・リブの影響があったと言われているが、ウーマン・リブとはアメリカの Women's Liberation の和製英語である。

森岡（2001：136）はウーマン・リブを「女性たちが、国家や男性からの束縛を解き放ち、

---

[6]　中外日報のウェブサイト
（http://www.chugainippoh.co.jp/NEWWEB/n-interviews/Nint/n-d060114.htm　2009 年 6 月 13 日参照）

[7] ウーマン・リブの時代には、森岡の生命学が生まれていなかったことは言うまでもない。

[8] 優生保護法が 1948 年に成立した法律で、目的として優秀な子どもを産み、劣った子どもを産まないようにすること。人工妊娠中絶が許されるための条件を示すことである。それまで、刑法の罪に問われていた中絶も、優生保護法の成立によって、ある条件が満たされれば、犯罪とはみなされなくなった。1996 年の改正により、「母体保護法」に改称。

自分自身の人生のために、女であることを自己肯定して生きはじめる、その生き方のことである」とまとめている。

ウーマン・リブについてもう少し深く考えてみたい。彼女たちの運動でよく知られているのは、1970 年代に行われた優生保護法の改正に対する反対運動である[9]。この優生保護法改正案について、森岡（2001：147）では、「優生保護法改正案とは、優生保護法から『経済的理由』を削除することによって安易な中絶をなくし、障害を理由とする中絶を認めることで生まれてくる子どもの『生命の質』を向上させ、結婚した女性は若いうちに子どもを産んでしっかり育てるようにさせる」という意図があるとわかりやすく紹介されている。

この問題をめぐって、障害を理由に中絶されるかもしれないという事態が生じることに深い怖れを抱く障害者たちと、女の生き方は女が決め男や国家に押し付けられたくない女性たちが、激しい反対運動を繰り広げた。

ウーマン・リブの主張は、「産む、産まないは女が決めることであって、国家は個人の生殖や出産に口を出さず、むしろ女が子どもを産める社会にしろ」というものである。

ここでは、主にウーマン・リブの運動の基本的な思想を取り上げる。障害者団体「青い芝の会」の主張や反対運動については、森岡（2001）に詳しいので、ここでは取り上げない。

森岡（2005：142－145）では、「胎児の権利」か「女性の権利」か、という議論について詳しく述べられている。当然ウーマン・リブの答えは、「女性の権利」の方を優先させる。この考え方の代表的なグループが中ピ連である[10]。しかし、この考えに疑問を持ったのは、同じウーマン・リブである「ぐるーぷ・闘うおんな」であった。彼女たちは「産める社会を！産みたい社会を！」という主張を掲げた。そして「本当に中絶は女の権利なのか」と、新宿リブセンターの田中美津が中心となって異議を申し立てた。優生保護法改正反対運動を通してウーマン・リブは完全に二つの団体に、あるいは二つの思想に分裂した（秋山 1991）。すなわち、中ピ連と新宿リブセンターの「ぐるーぷ闘う・おんな」の分裂である。

森岡（2001）は、田中の一風変わった思想に注目する。田中の主張は、「産む、産まないという女の権利はあっても、胎児に生きる権利はないのか。胎児は人間ではないから、女性には中絶する権利がある。そういう理屈で自分を納得させようとしても、しきれないものが、自分の内面にある。それがいったい何であるかを突き詰めることが必要だ」と訴えている。それを踏まえたうえで、中絶とは、胎児の息の根を止めてしまうことであり、「中絶は子殺しであり、中絶する女は殺人者である」と述べる。それは認めざるを得ないことであるが、問題は、女が中絶をしなくてはいけないような社会を国家や男たちが作っていることであると田中は述べている。

リブの女性たちは、彼女の発想に感化される。森岡もまた、田中の独特な発想に注目する。

---

[9] この優生保護法改正案というのは、事実上は改悪案である。

[10] 中ピ連とは、中絶禁止法に反対しピル解禁を要求する女性解放連合である。彼女たちは、マスコミ受けする目立つ行動で、いちやく男性メディアのリブの代名詞であった。

田中を中心に、当時のリブの女性たちは、「女とは何か」「この社会で生きていく中で息苦しいのはなぜか」などと、自分自身を見つめ直すことから始まっている。そして、自分の人生を肯定して生きることを主張しているのである。「中絶は女性の権利」だと主張するとき、女性の権利を優先するならば、中絶は殺人ではないと述べるであろう。しかし、上記で述べた、田中の「中絶する女は殺人者である」という言葉は、自らの立場を棚上げにしていない。「子を殺すことで生き延びる自分とは何か」と自分自身を問い詰め、生きていく。これは、森岡がいう「自分を棚上げにしない」ということにつながる。森岡は、ウーマン・リブを通して、また田中との出会いによって「生命学」のヒントを得た。

森岡は、この女性と障害者の対立から、日本の生命倫理の思想と運動が、明確な姿を持って立ち上がって来たと述べ、森岡（2001）では、1972 年前後が、日本の「生命倫理」の誕生の年だと断言している。当時は、生命に関する非常に難しい問題が、立て続けに起こり、この問題を、人間の問題として、あるいは倫理の問題としてどう考えればいいのか、あるいは社会をどういう風にしていけばいいのかを考えるのが生命倫理だとすれば、まさに障害者団体の青い芝の会とウーマン・リブの活動こそがそうであると森岡は述べる。

英語圏の生命倫理では中絶は「胎児は〈ひと〉なのかどうか」という議論を中心に考えていた。森岡（2001：244）では、もし〈ひと〉であるのなら、中絶は殺人であり、自分の生命が危ない時以外は中絶を行なってはならない。逆に、もし〈ひと〉でないなら、中絶にはなんの倫理問題もない。「女性の権利」対「胎児の生存権」の問題も、「胎児の生存権」が上回っていれば、女性は中絶を行なってはならない。また、もし「女性の権利」が上回っているのなら、女性は中絶を行なってもよい。英語圏の生命倫理は、このような二分法によって中絶を考えようとしていると述べている。

1.1 でも述べたように、森岡は生命倫理における二分法のやり方に疑問を持っていた。英語圏の生命倫理は、ある行為が合法か非合法かの判定を可能にするための基準を提供するという側面が強い。これは必然的に合法か非合法かという二分法を導くことになる。

しかし、障害者団体の青い芝の会とウーマン・リブの生命倫理は、二分法で自らを棚上げにするものでは決してない[11]。なぜなら、女性も障害者も自らの生き方、また自分自身の立場から生命というものを見ているからである。

田中美津は、権利の獲得ではなくそれ以前の考え方、要するに中絶することは子殺しであるという考え方を主張し、中絶問題、生命倫理における二分法の考え方を崩した。現在の生命倫理では、「生き方」や「生きること」そのものに焦点を当てていない。ここに森岡が求める生命倫理があり、森岡の「生命学」の誕生を促している。

私が森岡の思想に興味を持ち影響を受けたように、森岡も田中美津に刺激を受けた。田中との出会いによって、森岡の「生命学」の思想が深まったといえるであろう。

本章では、森岡の「生命学」とウーマン・リブとの出会いについて述べた。第３章では森岡が、影響を受けた田中美津という女性について紹介していく。

---

[11] 障害者団体「青い芝の会」や田中美津をはじめとするウーマン・リブは、自らの活動を生命倫理だとは述べていない。

第 2 章　田中美津研究

森岡（2001）ではウーマン・リブについて調べていくうちに、田中美津という女性に辿り着いた。彼女は、1970 年代のウーマン・リブを担っていた中心人物の一人である。本章では、田中美津という女性について、森岡（2001）と田中（2001、2005）を基に、彼女がどんな人であり、どのようなことを求め、どのような運動をしてきたのかをまとめる。また、自分自身「女である」ということから韓国留学で学んだ日本軍慰安婦について考察し、田中との考えの違いがあるかどうかを探求する。

2.1　田中美津と「とり乱し」

第 1 章でウーマン・リブの運動や、彼女たちの基本的思想について述べてきた。たくさんの女性がリブの運動をしてきたが、本節では 70 年代のウーマン・リブの中心人物である田中美津について考察し、特に田中の思想の特徴である「とり乱し」についての例を紹介する。

田中美津は、1970 年初頭に巻き起こったウーマン・リブ運動の中心的存在であり、ぐるーぷ・闘うおんなのリーダーでもあった。以後、ベトナムに渡り、帰国後は鍼灸師として活動している。

1970 年に彼女が書いた『便所からの解放』という長文のビラは、社会学者の上野千鶴子（1995）によると、「日本の女性が地声で語った、最も早い時期のリブのマニフェストとして、今もなお力を失わない」という。『便所からの解放』の内容については、次の節で紹介する。また、田中の思想が最も書かれているのは、『いのちの女たちへ　とり乱しウーマン・リブ論』（2001）である。この本の副題にある「とり乱し」というのは、田中の思想を知るためには、重要な手掛かりとなるキーワードとなっている。

森岡（2001：216）では、自分が抱えている「たてまえ」と「本音」の間の矛盾に気づき、おろおろすることを田中は「とり乱し」と呼ぶ、と紹介している。田中のいう「とり乱し」とは、どういうものなのか、田中（2001：69－71）を基にまとめる。

田中は、リブの運動を始めて間もない頃、それまであぐらをかいていたくせに、好きな男が入ってくる気配を察して、それを正座に変えてしまったことがあったという。この時、田中は「男から、女らしいと想われたいあたしがまぎれもなくいたのだ」という。そして、あぐらのままでいいと考えるあたしもいた。あぐらのままでいたいという気持ちも、女らしく思われたいという想いもどちらも本音ではなく、その時の本音とは、あぐらを正座に変えてしまった、その「とり乱し」の中にあるのだ。

田中は（2001：70）言う。

> そのとり乱しの中にあるあたしの本音とは〈女らしさ〉を否定するあたしと、男は女らしい女が好きなのだ、というその昔叩き込まれた思い込みが消しがたくあるあたしの、その二人のあたしがつくる「現在」に他ならない。

田中は、我々の本音の大部分は、無意識の中に隠れていて、しかも人間は無意識の中で

成り立っていると述べる。そして、女の場合、無意識を形づくっている核心に、女は女らしくがある。つまり、女は女らしくという理論は、本来たてまえであるにもかかわらず、そのたてまえは女の中に深く血肉化されていて無意識という意識を形づくっているという。

また、このように付け加える。

> 一人の人間には、互いに矛盾し合う本音が常に同居しているのであって、そのふたつが合わさったところが〈ここにいる女〉という存在なのだ。女たちから女たちへという想いも本音、しかし、ともすれば女から目をそむけたい想いがあるというのも本音――、リブは常にふたつの本音から出発する。その間のとり乱しから出発する。

女から目をそむけたい想いとは何なのか。田中（2001）は、男を基準として様々な形で仕組まれている社会によって女は自己否定を余儀なくされていると述べる。この社会は、女は無価値だという「否定」を突き付けてきた。そういう女から逃れたい、目をそむけたいという想いである。

そして、田中のウーマン・リブとの出会いとは、まさにこのとり乱しなのだ。田中（2001：50）によると、田中は市民運動と呼ばれるものに精を出していたころ、「市民」という言葉はなにか自分とは関係ない、運動用語としか思えなかった。人間として、市民として、ベトナム反戦というのは、あくまで運動に参加する際のたてまえであって、日常のあたしは、自分は無価値な女なのだ、という強迫観念におびえて、女から逃げようとし、これ以上「自己否定」なんかできるかと居直ったところで、田中とリブの出会いがあったと言われている。

1.2 で述べた田中の「中絶する女は殺人者」であるという考え方も、この「とり乱し」によって生まれたと森岡は考察する（森岡 2001：170）。女の身体は女のものだという本音と、私は胎児を殺した殺人者であるという本音の、その間でとり乱す地点から出発している。

田中の生き方は、自分の中の矛盾をさらけ出し、とり乱していくことから始まる。そして、とり乱しを通して人と人とがつながってゆける「出会い」というものを重要視している。

2.2　田中美津を通して「女であること」を考える

これまで田中の「とり乱し」について述べてきたが、私自身の「とり乱し」について「女である」ということを踏まえて考察し、田中の『便所からの解放』についてまとめていく。

私自身「とり乱し」だといえる体験は、思い返せばいくつでも思い浮かぶ。その中でも最大の「とり乱し」は、韓国留学中に学んだ日本軍慰安婦問題であった[12]。慰安婦については、田中美津の『便所からの解放』というビラにも少し触れているので本節でこの問題を考察していきたい。また自分を棚上げにしないためにも、韓国で学び、実感したことを述

[12] よく耳にする「従軍慰安婦」という呼称は、正しい言葉ではないと韓国側が訴えた為、本論文では「日本軍慰安婦」と呼ぶことにする。また、韓国では、「挺身隊」と呼ばれている。「慰安婦」という名前も、誰が慰安されるのか、ということが問題になっている。私自身もこの「慰安婦」という名前に疑問を持っている。

べていきたい。

日本軍慰安婦とは、日本の戦略戦争当時、日本軍慰安所に連行され、強制的に性暴力を受けながら生きなければならなかった女性たちのことである[13]。韓国の他にも中国、フィリピン、インドネシアなどの現地の女性たちが慰安婦にさせられたという。その中でも数多く連行されたのが、朝鮮半島に居住する女性であり、まだ性体験のない未婚の処女であった。そのような女性が集められた理由は、処女であれば軍人の性感染の心配がないからである。

韓国に留学するまで、私はこの事実を知らなかった。授業でナヌムの家を訪問し、ハルモニたちとあうことができた[14]。毎週水曜日には、日本大使館前でハルモニたちによる慰安婦問題の解決を要求する「水曜デモ」が行われている。このデモにも日本人留学生で参加することができたが、日本大使館前で日本人が日本に対しデモを行うのは、何とも言えない屈辱であった。なぜなら私自身が、慰安婦を苦しめていた日本人という「同じ国籍」であるということ、そして日本人である前に一人の「女」であるからだ。慰安婦問題に対し「日本人」であることが恥ずかしく思うと同時に、同じ「女」として許せない問題だと率直に感じた。この二つの要素を持つ私に、一体何ができるのか。今考えると、これは私の「とり乱し」であった。同じ「女」として男がしたことは許せないし、何かしてあげたいという本音がある。しかし反対に、同じ「日本人」である限りハルモニたちの力にはなれないし、多くの人たちに伝えていくことはできてもそこから先が進めないという本音があった。自分には何もできないと実感した私は、結局ハルモニと話すことしかできなかった。

ハルモニと話す機会は、二回あった。一回目は、授業でナヌムの家を訪れた時である。歴史館を見学し、李玉善（イオクソン）ハルモニの証言を聞いたあと、私はハルモニに挨拶がしたくてまだカタコトな韓国語で話しかけた。私が日本人だということを伝えるとハルモニは日本語で「どこから来たの？」と言葉を返してくれた。流暢な日本語で話すハルモニに「日本語が上手ですね」とは言えるはずがなかった。なぜならその背景には、日本軍に強制的に日本語を教えられたという事実があるからだ。そして、ハルモニは私の手を強く握り日本語の勉強をしていると話してくれた。予想外の答えに驚いてしまい何も答えられず、ただうなずいているだけであった。もし私が男であったら、この時ハルモニに話しかけることはなかっただろう。同じ「女である」からこそ、ハルモニに話しかける勇気があったのだと今になって思う。

二回目は、水曜デモの後にソウル市内にあるハルモニの家に招待してもらった時である。李容洙（イヨンジュ）ハルモニが慰安所での貴重な話をしてくれた。ナヌムの家の時よりも多くハルモニの話を聞くことができたし、ハルモニといろんな話をすることができた。二人のハルモニは私たちに対して、笑顔で接してくれた。しかし、私はハルモニと笑顔で話す度に日本人であることに申し訳なさを感じ、日本人という自分から逃げたい気持ちでいっぱいだった。

---

[13] 『未来をひらく歴史　東アジア 3 国の近現代史』（2005：144）

[14] ナヌムの家とは、1992 年、韓国の仏教徒や市民たちの募金によって開設された、元日本軍慰安婦（韓国ではハルモニ、おばあさんと呼んでいる）たちの共同生活施設のことである。歴史館や教育館も併設され、日本軍慰安婦問題に関する教育の場ともなっている。

田中（2001：158）では、〈女から女たちへ〉の出会いにあたしは固執すると述べている。また、男との出会いを追求する中で、女との出会いを追求するのではダメなのだという。まさに、私と慰安婦との出会いは、田中がいう〈女から女たちへ〉の出会いである。

田中美津もハルモニたちに会いにナヌムの家に訪れた（田中：2005：233－238）。田中は、ハルモニたちに温泉に行ってもらうためのカンパを持っていった。なぜ温泉なのか、田中は「ハルモニのからだに、強制的に性の道具とされてしまった過去が、腎の病として深く刻み込まれていると知ったら、いてもたってもいられなくって・・・」と述べている。鍼灸師である田中のアイディアである。また、ハルモニたちは日本の戦争責任を追及するために生きているわけじゃなく、多くは残されていない時間の中で、少しでも「あぁうれしい」「あぁ楽しい」の極楽を味わってもらいたい。忘れることのできない過去だとしても、悲しみは喜びと両立するものだと述べている（田中：2005：238）。

慰安婦問題をどう捉えるか、自分に何ができるかは人それぞれ違う。慰安婦問題を日本の恥と捉え、何をしても「日本人」である以上力にはなれないと、私ははじめから臆病になっていた。田中の場合はハルモニに「過去」ではなく「今」を生きてもらいたかった。それは、田中の原体験がそう思わせたに違いない。

田中の原体験とは何か、慰安婦と絡めながら考えてみたい。田中（2001：94）によると、彼女は小学二年生の時、実家の魚屋の従業員から性的ないたずらをされた。まさに慰安婦の状況と同じなのである。慰安婦も田中も「純潔ではない」という観念が、性的虐待の時点で植え付けられたといえる[15]。処女でない＝「純潔ではない」という強い観念が彼女たちにはあり、そもそも女が処女というものに価値をつけるようになったのは、性奴隷や慰安婦などの歴史があるからではないだろうか。元慰安婦が 50 年もの間、自分が慰安婦であり、性暴力の対象であったということを心に秘めていたのは「純潔ではない女」という観念がそうさせたのであろう。そして元慰安婦の証言は、田中の言葉を使えば、「性否定から性肯定へ」の変革であるといえる。

この「性否定から性肯定へ」の変革が書かれているのは、1970 年の田中の『便所からの解放』という長文のビラである。このビラは、日本のウーマン・リブの歴史的誕生だといわれている。そして、日本軍慰安婦問題を早い時期で言及しているのだ。

田中（2001：333）によると、男にとって女は母性のやさしさ＝母か、性欲処理機＝便所か、という二つのイメージに分かれる存在としてあると述べている。

この「便所」というのは、戦時中「女」を指す隠語であった。また、「男とすぐ寝る女」をさす差別語として「公衆便所」という隠語も使われていた（上野 1995：4）。戦時中、日本軍慰安婦がその対象として呼ばれていた。1990 年代に日本軍慰安婦問題が広く社会問題として認知される二十年以上も前に、リブは慰安婦について語っていたのである。

『便所からの解放』（1970）で田中は、男は女の母性（やさしさ）と異性（SEX）の二つの側面に抽象化し分割する。そして、上記で述べた男の母か便所かという意識は、現実に

15　慰安婦の場合は、個々の性暴力ではなく、日本国家が制度的に慰安婦を導入したため、単純に田中の受けた性的虐待と同一視できない。

は結婚の対象である女か、遊びの対象である女かという風に当てはめているという。男によって、性と精神を分離させる意識構造が生み出され、女は部分として生きることを強制されると田中は述べる。このビラで、田中は女の解放を性の解放として提起している。これ以降書いた田中のビラには、この『便所からの解放』からの引用が多い。

第 3 章　「自分を棚上げにしない」と「とり乱し」

本章では、これまで述べてきた、森岡の生命学における「自分を棚上げにしない」と田中の「とり乱し」について、その二つのキーワードの間にある差や共通点を分析する。

森岡は生命学の基本的発想を「自分を棚上げにしない」ことであると何度も述べてきた。言っていることとしていることが矛盾しあう中、一体棚上げにしてしまった自分とは何なのか、を考えることが大事であると森岡はいう。

「とり乱し」とは、2.1 でも述べたが、自分が抱える「たてまえ」と「本音」の間の矛盾に気づきおろおろすることである。二つの矛盾しあう本音が合わさったところで、矛盾を矛盾としてごまかしなく見つめるところから出発するということである。

「自分を棚上げにしない」とは「とり乱し」と表裏一体の関係であると考える。要するに、「自分を棚上げにする」中に「とり乱し」が存在するということである。例えば、1.1 であげた環境問題において自分を棚上げにしている例では、「レジ袋をもらわないなど身近なところから、一人一人がゴミを減らす努力をしなければない」と環境問題を何とかしなければいけないといったたてまえと、実際にコンビニに行って、レジ袋をもらい後悔してしまうという本音がある。その二つの矛盾する思いは自分を棚上げにしているからこそ起こるといえる。田中のウーマンリ・リブにおける「とり乱し」と比べると、この例は少し日常的になってしまうが、自分の本音の部分を直視するという点に関しては、問題の大きさとは関係ない。

森岡の「生命学」と田中の「とり乱し」は、どちらも自己を問い直すことから始まっている。この点は、重要な共通している点である。自分自身と出会うことから、他者との出会いが生まれる。また、他者との出会いから自分自身とは何なのかを問いなおすこともありうる。森岡の場合は、田中との出会いによって、田中に影響を受けた自分自身というものに出会った。そして、自分はこのままでいいのだろうかと自問し、「生命学」という生き方を構築していった。

森岡は田中の思想に影響を受けたが、田中がいう「とり乱し」をそのまま引用して「生命学」を築いてきたわけではない。田中のいう「とり乱し」からの出発ではなく、その「とり乱し」に初めから釘をさすように「自分を棚に上げない」という思想を立てた。田中によって生き方を学んだが、田中と同じ道を辿るのではなく、森岡は田中に影響を受けながらもどこの枠組みにも当てはまらない、自らの第三の道を歩まねばならない。そこに森岡のオリジナルの生き方である「生命学」があるといえる。

結論

本論文では、田中美津に刺激を受けた森岡正博、その森岡正博に刺激を受けた私から見た田中美津という 3 人の関係を考察していくことをテーマに、森岡を中心軸に田中の思想と私自身について述べてきた。今回、森岡を通して、また田中を通して自らを見つめなおすことの大切さを学んだ。実際に、第 2 章で田中を通して自分自身の「とり乱し」に気づくことができ、韓国での貴重な体験を振り返ることができた。第 3 章では、「自分を棚上げにしない」生命学と、矛盾した二つの本音から出発する「とり乱し」の関係を発見することができた。また、研究を通して、これまでの二分法による考え方に対し、森岡も田中も二分法という考え方ではなく新しい角度から物事を考えていることが分かった。

二人に出会っていなければ、自分の中にある矛盾を直視することもなければ、棚上げにしている自分に気づくこともなかっただろう。また、二人の思想と深いところでつながりあえたと思う。

参考文献：

井上輝子・上野千鶴子・江原由美子編（1995）『リブとフェミニズム』岩波書店

上野千鶴子（1995）「日本のリブ―その思想と背景」（井上輝子、他編（1995）に所収）岩波書店

小熊英二（2009）『1968〈下〉叛乱の終焉とその遺産』「第 17 章リブと私」新曜社

鹿野政直（2002）『日本の近代思想』頁 128－133 岩波新書

鹿野政直（2004）『現代日本女性学―フェミニズムを軸として』有斐閣

加納実紀代編（2003）『リブという＜革命＞』インパクト出版会

ぐるーぷ・闘うおんな（1970）「便所からの開放」（井上輝子、他編（1995）に所収）岩波新書

千田有紀（2003）「帝国主義とジェンダー　『資料　日本ウーマン・リブ史』を読む」（加納実紀代編（2003）に所収）インパクト出版会

田中美津（2001）『新装版　いのちの女たちへ　とり乱しウーマン・リブ論』パンドラ

田中美津（2005）『かけがえのない、大したことのない私』インパクト出版会

日中韓 3 国共通歴史教材委員会（2005）『未来をひらく歴史　東アジア 3 国の近現代史』頁 144 高文研

森岡正博（1996）『宗教なき時代を生きるために』法蔵館

森岡正博（1988）『生命学への招待　バイオエシックスを超えて』勁草書房

森岡正博（2000）『増補決定版　脳死の人―生命学の視点から―』法蔵館

森岡正博（2001）『生命学に何ができるか　脳死・フェミニズム・優生思想』勁草書房

森岡正博（2003）『無痛文明論』トランスビュー

森岡正博（2005）『感じない男』筑摩書房
森岡正博（2005）『生命学をひらく―自分と向き合う「いのち」の思想』トランスビュー
森岡正博（2006）『自分と向き合う「知」の方法』筑摩書房
森岡正博（2008）『草食系男子』メディアファクトリー
森岡正博（2009）『33 個めの石』春秋社

URL

森岡正博の生命学ウェブサイト　http://www.lifestudies.org/jp
http://www.lifestudies.org/jp/seimeigaku03.htm

中外日報ウェブサイト
http://www.chugainippoh.co.jp/NEWWEB/n-interviews/Nint/n-d060114.htm